

主体的な学びの実践における教育的効果についての検討

—学校種や教育領域の違いに着目して—

河村 明 和

【問題と目的】

近年の学校教育において、資質・能力の育成が求められている。この資質・能力は日本では「生きる力」として求められており、また、経済協力開発機構（OECD）の PISA 調査において資質・能力は、単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力、すなわちコンピテンシーとして取り上げられている。そして、コンピテンシー（能力）の中で、特に、1）人生の成功や社会の発展にとって有益、2）さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要、3）特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたものはキー・コンピテンシーと定義されている（中央教育審議会、2005）。

このように、資質・能力が定義され育成が求められる中で、教育の方法や形態が検討され、2014年の中央審議会答申では、「ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である」という視点です。そのために必要な力を子供たちに育むためには、『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと『どのように学ぶか』という、学びの質や深まりを重視すること、が必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります」とされている。

このアクティブ・ラーニングとは、2012年の文部科学省の用語集で、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と定義される資質・能力の育成を考慮した教育方法である。

2017年に文部科学省より告示された幼稚園教育要領、小学校、中学校の学習指導要領、2018年に文部科学省より告示された高等学校における学習指導要領でも、それぞれの発達段階で求められる資

質・能力が明確にされ、知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力や人間性等やその素地が求められている。そして、アクティブ・ラーニングという言葉ではなくなったが、資質・能力を身につけるための望ましい学習の方法として、「主体的で対話的な深い学び」の実践が求められている。

しかし、生きる力が学習指導要領で取り上げられ（文部省，1989）、学習に生徒の自主性、主体性が求められるようになった1989年以降で、学校や教員個人が独自の教育方法を活用した実践に教育的な効果があったという報告はされている。しかし、それらをどの学校種で、どのような学習方法で実践を行ったか、実践を行った教育領域は何なのか、などを整理し、体系的にまとめた知見は見られなかった。学校種や、教科、特別活動など教育領域の違い、実践する学習法によってどのような教育的効果が期待できるかを整理しまとめることは、今後の教育実践の指針となり教育への一助となることだと考える。

よって、本研究では、一つ目に、学校種、二つ目に、教育領域、三つ目として、教育的な効果、の視点を持ち、教育実践の方法における先行研究を整理し検討することを目的とする。なお、整理し検討を行う教育の方法は、主体的な学びを中心に検討を行う。これは、2017年の学習指導要領（文部科学省，2017）においても、児童生徒の知識・技能に加え、資質・能力の育成が望まれる教育方法として「主体的で対話的な深い学び」が求められており、主体的な学びは対話的な学びや深い学びの前提となるものであると考えられるためである。

【方法】

学術論文雑誌検索サイト CiNii Articles で「主体的な学び」をキーワードとして、学習指導要領に生きる力の育成が明記された1989年から2017年までの学術論文を中心に検索した。検索の結果該当件数は494件であった。主に該当した研究雑誌は授業実践開発研究、科学教育研究、理科教育学研究、数学教育学研究、国語教育研究などであった。また、これらの研究雑誌に掲載されていた論文中で頻繁に引用されている論文、学習指導要領を始めとする文部科学省から告示された報告書や通達、学会発表論文集に収録されている発表論文、大学紀要等も含め、本研究に関係する文献対象として抽出した。また、抽出した先行研究に引用され、先行研究を概観する上で重要と思われる論文や書籍については、年代も1989年以前のデータを一部対象とした。さらに、本研究は資質・能力の育成が望まれる特別活動など日本特有の教員活動を検討の対象とするため、日本の研究を中心に取り上げる。そして、取り上げる実践は、文部科学省より告示された幼稚園教育要領、学習指導要領にのっとって教育を行っている国公立の学校である幼稚園、小学校、中学校、高等学校での実践を対象とした。これらの文献の中から、①学校種、②教科や特別活動など教育領域、③主体的な学びにおける教育的効果、の3つのカテゴリーをもとに、その後の分析の対象とする研究を選択した。

【結果】

1. 幼稚園教育における知見

幼稚園における主体的な学びの先行研究は検索では14件該当したが、純粋に幼稚園だけを対象に研究や実践を行った報告はとても少なかった。その中で、幼稚園教育における知見では、食育に関する実践事例が確認された（鈴木，2010）。園児に五感（味覚，視覚，聴覚，触覚，嗅覚）や食を営む力（食べ物の大切さを知る，食べ物を上手に選ぶ）を体験から学ぶ学習会を行い，園児は食事を通して体験学習の機会が設定されている。そしてこの教育的な効果の検証には，アンケートから言葉を抽出し検討するなど質的な分析がなされており，その結果から，園児の主体的な学びは園児の食事への意識や食事のマナーの向上だけでなく，保護者の意識へ影響があることが示唆されている。一方で，2017年の文部科学省が告示した，幼稚園教育要領に主体的・対話的で深い学びを通じ，「知識及び技能の基礎」，「思考力，判断力，表現力の基礎」，学びに向かう力，人間性等の育成が求められているが，幼稚園教育における教科など学習の先行研究は確認できなかった。

2. 小学校教育における知見

小学校における主体的な学びでの検索結果は69件であった。このような中で，小学校における先行研究の知見では，教科の中で，国語科の実践において，課題解決的，協働的に表現を工夫し，自分たちの伝えたい思いと情報，読み手の気持ちを考えて，チラシをつくらうとする（関心・意欲・態度）こと，書いたチラシを発表し合い，相互評価することによりブラッシュアップを行わせることで，学習者に能動的な学習（アクティブ・ラーニング）を行わせることを目的とした事例が確認できた。この事例では，取り組み後の作文により生徒の意欲の向上が確認でき，教員が児童の作文を行う様子からも書く力の向上が確認できたとされている（水谷・小川，2015）。道徳での実践では，補助発問，問い返し対話を行うことによる問題解決的な手法で多面的・多角的な考えに触れることにより，相手の気持ちを深く推し量り，相手の立場で考え，思いやりの心を大切にする気持ちを育てることを目的とした事例が確認できた（遠藤・長屋・足立，2017）。授業後のアンケートを数値化し，また，アンケートの単語を抽出し頻出数などを検討した結果，友人との交流の中で，相手の意見を聞くことや，自分の意見を表現することへの関心が高まっていることが確認されている。体育科の実践では，より充実した体育科の実践を行うために課題解決を主とした，主体的な学習を「めあて学習」と捉え，またジグソー学習を基礎とした協働的な学習を「学び合い」を行った実践が確認でき，質問紙を活用し測定を行った結果，教育的効果として，体育における意欲や学び合いへの意識などに，効果があったとされている（本間，2016）。

また，教科だけでなく総合的な学習の時間の事例において，生徒に環境学習を行う際に生徒の主体性を促し，課題を自分のことと捉えるために，環境に「浸る」ということを意識し，体験活動を行う。また，生徒は自分の活動を可視化するために，自分でできるか，できないか，簡単か難しいかを判断

する座標軸のシートを活用する実践が確認できた（高橋，2010）。この取り組みはアンケートや生徒の感想から、生徒が必要な情報かを判断する能力、自己の生き方を考え、自己の成長を感じることができるなどの効果が示唆されている。

3. 中学校教育における知見

中学校における主体的な学びでの検索結果は53件であった。このような中で、中学校における先行研究の知見では、教科の中の理科の授業において、仮設検証方法や、問題解決が生徒に問いが生まれることにより、主体的な学びに良い影響を与えることが、質問紙による量的な分析によって示唆された（山田，2017）。また、国語科の授業において、課題の設定に時間をかけた授業の実践では、生徒からの問いをもとにグループを形成するなど、その後のディスカッションを行う授業の流れがスムーズになったことで、学習意欲や発表に対する苦手意識が少なくなったことがアンケートや教員の観察から、報告されている（塚本，2001）。そして、道徳の実践において、議論を通じて相手の気持ちを深く推し量り、様々な立場や多様な形による思いやりを大切にしようとする気持ちを育てる事例を確認できた。生徒に実施したワークシートの単語を抽出し検討した質的な分析の結果から、道徳科の目標である、自己の生き方や考え方を深められることが示唆されている（遠藤他，2017）。

4. 高等学校教育における知見

高等学校における主体的な学びでの検索結果は34件であった。このような中で、高等学校における先行研究の知見では、教科において、自己評価する活動を複数回行い、評価を比較する実践が確認できた（後藤，2013）。生徒は自分の科学リテラシーに対して評価を行うことで、学習に主体的になり、また、評価に対しても肯定的な受け止めることが、アンケートと生徒の記述からの分析で示唆されている。また、体育の授業実践においての知見も見られた。体育科学の知識を生徒自身の体を通して身近に伝え、そして、自己への気づきを踏まえて、生徒が主体的に体づくり運動の授業に取り組んでいる事例である（三宅・岩部・岡本・合田・高田・藤本・生関・松本，2017）。効果測定は生徒が授業後に行う8項目の形成的な授業評価を集計した量的なもの、生徒が書いた学習ノートの文字から質的に測定がなされており、効果として、保健体育の専門的な知識と理解に加え、自己への理解などから、日常的に行う運動の見通しを立てることができるようになったとされている。

全ての学校種を通じての結果

それぞれの学校種における結果より、以下の4つのことが明らかになった。

一つ目として、先行研究に見られる知見は小学校、中学校の義務教育段階の知見が多いことが明らかになった。加えて、全体を通して先行研究に見られる知見は学会誌などではなく、各学校の紀要や論文集などが多かった。

二つ目として、どの学校種、発達段階においても、児童生徒の主体的な学びを促す教育方法として

は、生徒に、仮設を立てさせる、課題を見つけさせる、問いを出させるなど課題解決型や問題解決型などを意識して実践を行っている事例が多かった。加えて、主体的な学びを前提として対話的や協働学習を促す事例も見られた。

三つ目として、先行研究に見られる事例は、主に教科におけるものが多数であり、特別活動など教科以外の教育活動における知見はあまり見られなかった。

四つ目として、教育的効果の検証については、教員の観察をまとめたものや、アンケートや作文などから、文字として確認されるなど、質的なものが多かった。一部、作文の中で使用されている単語の数やアンケートなどから量的に検討されているものも見られたが、心理的尺度などを活用して資質・能力の向上など教育的な効果を客観的な指標で検討したものは見られなかった。

【考察】

本研究の結果より、児童生徒の資質・能力の育成を考慮して行われる主体的な教育方法は、児童生徒自身に、問いや課題を立てさせるものが多く、その活動を通して生徒の主体的な学びを図るものであると考えられる。しかし、今回の研究では、教科における先行研究が多く、児童生徒の資質・能力の育成が求められている中で、特別活動における知見が少なかった。特別活動は1947年に文部省から告示された学習指導要領（試案）における自由研究を前身としており、生徒の個性や人間性の伸長を図るものである。その上で特別活動の知見が少ないのは、特別活動の基本原則が「なすことによって学ぶ」というものであり、特別活動を行う上で、必然的に主体的な学びになるため、あえて研究が行われず、先行研究が教科の知見と比較しても少なかったことが考えられる。しかし、溝上（2015）によると主体的な学習にも段階があり、Ⅰ段階として、課題依存型の主体的学習「興味・関心をもって課題に取り組む書く、話す、発表する等の活動を通して課題に取り組む」。Ⅱ段階として、自己調整型の主体的学習「目標や学習方略、メタ認知を用いるなどして、自身を方向づけたり調整したりして課題に取り組む」。Ⅲ段階として、自己物語型の主体的学習「中長期的な目標達成、アイデンティティ形成、ウェルビーイングを目指して課題に取り組む」とされている。この中でアクティブ・ラーニングは第Ⅰ段階に当たるとされているが、今回整理した教科における先行研究では、年代などから、アクティブ・ラーニングが意識されていると考えられ、第Ⅰ段階に当たる事例が多かったと考えられる。

また、道徳や総合的な学習の時間、そして自己評価をする高等学校の授業では、学習の効果が、自己への気づきや生き方、考えの深まりなどが挙げられ、主体的学習の第Ⅱ段階目に該当すると考えられた。人間性を醸成することが目的である道徳や、教科の知識を横断的に活用する力が求められる総合的な学習の時間、自己評価を行うことは、その学習に求められる目的の特性として、自分も含めて問いが生まれると考えられ、より高次の主体的な学びができると考えられた。そして、今回実践が確認できなかった特別活動は必然的に主体的な学びとなる特性が備わっているかもしれないが、資質・能力の育成を特に図ること求められる活動であり、主体的な学習のⅡ段階目やⅢ段階目を目指すこと

が求められると考えられる。そのため、今後は特別活動にも実証的な研究が求められるだろう。

最後に本研究の限界にふれる。本研究では、主体的な学びをキーワードとしたが、特別活動など体験的活動が中心の教育活動においては必然的に主体的な学びとなり、研究が行われていない可能性があり、教科以外の活動の知見があまり整理できていないこと。実践が報告されている学校の多くが国立大学の付属の学校であり、公立の一般的な学校にあてはまる知見かを判断できていないこと。求められている資質・能力は可視化することが難しく、教員個人の観察などによる質的な効果検証が主であることから、客観的な効果として一般化がしづらいことである。また、今回の研究では、先行研究の中から学級の状態など学習の環境からの影響などに対して検討することはできなかった。

以上を整理すると今後の課題としては、教育方法が教員個人だけのものではなく、良い実践を一般化するためにも、実践する教育方法の背景にある理論を明確化し、実践研究を行うことが求められること。資質・能力は可視化することが難しい対象ではあるが、心理尺度など資質・能力に対しての客観的で実証的な効果の測定の方法などが求められること。また、学習を行う環境なども考慮して検討することが求められること。そして、教科教育だけでなく、特別活動など、教科以外の教育活動においての、資質・能力の育成など、教育的効果の知見が求められ、より高次の主体的な学びが求められることである。これらのことを今後、教育的な効果における実証的な研究を行う際の課題としたい。

【引用文献】

- 中央教育審議会 2005 初等中等教育分科会 教育課程部会（第27回（第3期第13回））議事録・配付資料 [資料4-1]
- 中央教育審議会 2014 第95回配布資料資料1-1. 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）諮問理由
- 遠藤直人・長屋樹廣・足立英世 2017 ねらいとする道徳的価値の側面から人間としての生き方見つめる児童・生徒の育成 研究紀要 平成29年度, 134-147.
- 後藤顕一 2013 高等学校科学実験における自己評価の効果に関する研究—相互評価表を活用して— 理科教育研究, 54 (1), 13-26.
- 本間忠明 2016 めあてをもつて学び合う力を身に付ける体育学習の在り方に関する研究：小学校体育科体づくり運動領域におけるジグソー法を用いた実践を通して 創大教育研究 (26), 115-133.
- 文部科学省 2012 用語集 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_iceFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf 2018.4.6)
- 文部科学省 2017 幼稚園教育要領
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領
- 文部科学省 2018 高等学校学習指導要領
- 文部省 1947 学習指導要領（試案）
- 文部省 1989 小・中学校学習指導要領
- 三宅理子・岩部 順・岡本昌規・合田大輔・高田光代・藤本隆弘・生関文翔・松本 茂 2017 高等学校体育における「体づくり運動」の体力を高める運動の授業研究：体力科学を学ぶことに焦点を当てて〈第2部 教科研究〉中等教育研究紀要／広島大学附属福山中・高等学校, 57, 188-197.
- 水谷徹平・小川 亮 2015 チラシ作成活動を通じた言語活動の充実：アクティブラーニングを意識富山大学人

- 間発達科学研究実践総合センター紀要（10），61-70.
- 溝上慎一 2015 主体的な学習からアクティブラーニングを理解する 学研教育みらい主催高校教育フォーラム 2015 (http://www.gakuryoku.gakken.co.jp/pdf/highschool_forum/2015dl/03_documents_201508.pdf 2018.4.6)
- 鈴木秀子 2010 子どもから家庭へつなぐ食育：保護者の「学び」からの検討 会津大学短期大学部研究年報，(67)，129-147.
- 高橋広樹 2010 主体的な学びを促す思考ツールを使った言語活動と体験の充実：5年総合的な学習の時間「今わたしたちにできること」の実践から 授業実践開発研究，3，37-44.
- 塚本桂子 2001 主体的な学び方と豊かな表現力を身に付けさせる国語科指導の在り方：「方言」のコース別学習におけるさまざまな表現活動を通して 教育學雑誌，36，28-45.
- 山田貴之 2017 中学校理科授業における生徒の主体的な学びを構成する諸要因モデル 科学教育研究，41（3），361-372.